

「源氏」「夜の寢覚」の番について
〈下〉

——『物語後百番歌合』の配列から——

大槻 修

六

『後百番歌合』七番 左右の歌は、

左 夕立ゆふたちのなごり涼すずしき宵よのまぎれに、温明殿ぬめいのわたりをたたみ歩あき給たまふに、琵琶ひばをいと面白おもしろく弾ひけば、

東屋あづまやをしのびやかにうたひて、立たち寄より給へるに

源 典侍ないしのすけ

立たちぬるる人しもあらじ東屋あづまやにうたてもかかある雨あまそそぎかな

右 嵯峨さあやにて、宰相さうざいの君きみが局つはねにて、女君にょきみの琵琶ひばの音おとを聞ききて

入道右衛門督

つげよなほままのあまりの雨あまそそぎ我われたちぬれて帰かへりわびぬと

(1)
である。左は『源氏物語』紅葉賀の巻から源典侍の歌。女遊びについて、桐壺帝の諫言を受けた源氏が、六十歳近い老女の源典侍と戯れる。頭中将も競い心を持ち(「二四」、夕立の宵に、二人の寢所に忍び込んで、太刀を抜き騒ぎ

嚇す。色好みな老女房の風流滑稽譚。

右は『夜の寝覚』中間欠巻部分より、式部卿宮の中将(当時)の歌。物語第六年、寝覚の上(当時は中君と称する)

十八歳の頃の八月十五夜、侍女宰相の君の局にしのだ彼は、寝覚の上の妙なる琵琶の音に心惹かれた。あと、中将はその旨を帝に奏上、それが、以後長く、寝覚の上に愛情を寄せる帝の心の導火線となる。なお、色好みの彼は、かつて但馬守の三女に恋文を送り、また物語第十四年、彼は故老関白邸にしのび込み、時に未亡人の寝覚の上を盗み出そうとして、間違えて故老関白の次女と契る、というエラーを行う。六番左と七番左とを対比すると、

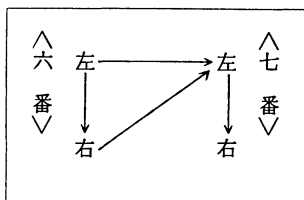
一、橘の香・時鳥から夕立へと、季節の推移が見られる。

一、五月雨の晴れ間の立ち寄り(六・左)に対して、夕立のなごり涼しい宵のまぎれ(七・左)

一、麗景殿女御は、物語本文に「ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげな」る人で、宮などもなく、故院のあと、淋しく源氏の庇護を受ける身であり(六・左)、対する源典侍もまた「年いたう老いたる」女で、「人もやむごとなく、心ばせありて、あてにおぼえ高」い人柄であった(七・左)。

という共通項に近い線を考え得よう。六番右から七番左を考えると、

一、まさこ君が、中納言の君を訪問した帰途、宣耀殿女御の邸に立ち寄る条を描いた『寝覚物語絵巻』詞書に、月入り方の明け暗れの空、春秋の霞・霧にも劣らぬ気色なるに、いと大きなれど、木立ものふり、いたく荒れたる所に、散りにし花の木末どもいと若やかに青み渡れるなかに、松の末より木高く咲きかかりたる藤の、いとなべてならず、物よりことに面白し。過ぎにし春の夢のまどひも忘れぬばかり見ゆれば、車おしとどめさせて見入るれば、箏の琴の音も聞こゆなり。



とあり、関心を持ったまさこ君が、隨身によって宣耀殿女御の住まいと知り、

まこと、さぞかし。いで、あはれを添ふるほどなめるを、いま少し近く寄りて、花をも見、琴の音をも聞かむ。

もし見つくる人あらば、往來の道にも過ぎがたくて、などもいひより、さらずば、忍びても出でなむ、と思して、御車より下りて

歩み入った、とある。一方、光源氏もまた、「夕立して、名残涼しき宵の紛れ」に、行き過ぎがたく、立ち寄ってしまう。

一、ともに楽の音に誘い込まれ、好き心からしのび入る男君。

と、いわば両者とも「玉ばこの道ゆきずりの便り」といえよう。ついては、六番右→七番左とも考えておきたい。六番右と七番右との関連は、楽の音に魅せられての関心事という共通点はあるが、それは世上一般の風流事に見られることでもあろう。最後に、七番の番に移る。

一、ともに琵琶の音にひかれての事。

一、催馬楽の「東屋」の縁。

一、色好みな老女、源典侍の風流滑稽譚（七・左）に対して、やがて人違い事件を引き起こす好色宮の中將の軽率な人柄（七・右）

など、七番左→七番右と考えられよう。

以上を総合すると、上図のように、六番左から七番左への連想に加えて、六番右から七番左へ

〔日本古典文学全集『夜の寝覚』付載の鈴木一雄氏釈文に拠り、適宜、漢字をあてはめ、句読点、濁点を設け、いわゆる鑑賞本文にした。——線部は、『校注夜半の寝覚』付載の石川徹氏の補記に拠った。以下同然。〕

の対応、さらに七番左――右と考えておきたい。

八番の番いに移る。

左 紫の上かくれ給ひてつぎの年の秋

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞ置きそふ

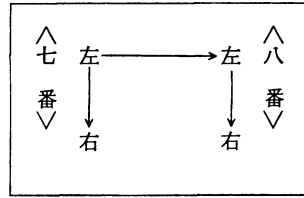
右 右大将、三位の中將と聞こえし、北山にこもりぬと伝へ聞きて
知らざりし山辺の月を一人見て世になき身と思ひ出づらむ

左は幻の巻から源氏の詠。紫の上の一周忌が近づき、夕霧と諸事を打ち合わせる源氏の心は痛ましい。折から時鳥ほのかに啼き、盛夏の風物につけても、故人を恋う「一九」ばかり。淋しい七夕、長恨歌に思いを寄せて涙を流す。物語本文に、「七月七日も例にかはりたること多く、御遊などもし給はで、つれづれにながめくらし給ひて、星合見る人もなし」とある。

一方、右は末尾欠巻部分より寝覚の上の歌。物語第十八年か（年代に異説あり）、いわゆる寝覚の上偽死事件によつて、彼女は白河院を脱出し得た。この死は、冷泉院を始め関係者たち皆まったく信じて疑わない。さて、彼女は生存を秘して某所に身を隠すが、まさき君の悲嘆ぶり、その北山籠りを伝え聞いて、秋は月明の夜に歌を詠む。なお、『風葉和歌集』巻十七、雑二（二二七〇）に、詞書「世になきさまに聞こえてのち、右大将、北山にこもれりと伝へ聞きて、月の明かりける夜。ながむらん面影も見る心地して思ひやられければ」として入集している。まず七番左と八番左の対応を見ると、

一、「夕立のなごり」から「秋」「七夕の」と、季節の推移を追っている。

一、催馬楽の「東屋」――「我立ち濡れぬ 殿戸開かせと」と「おし開いて来ませ 我や人妻」との、男女間の掛け合いは、即「七夕の逢ふ瀬」へと、連想が働くといって宜しかろう。



七

九番の左右は次の通りである。

左 芹川の大將のとは君の、秋の夕べに思ひわびたところ書きたる絵を見て

右大將

荻の葉に露ふき結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみける

右 白河の院にて、身の有様思しつづくる夕暮に

しをればわが故里の荻の葉に乱るとつげよ秋の夕風

左は、蜻蛉の巻から薫の歌。明石中宮主催の法華八講の五日目、はからずも西の渡殿に居る女一宮を見た薫は心惹かれて、妻の女二宮に交際を勧める。女一宮を恋いながら、大君以来の物思いに沈む薫〔四四〕。物語本文に、「芥

一、「うたてもかかる雨そそぎ」から「涙の露ぞ置きそふ」の縁も通じ合うか。

の諸点が考えられる。つぎに、七番右から八番左への対応だが、同じく「まやのあまりの雨そそぎ」(七・右)「東屋」と「七夕の逢ふ瀬」(八・左)との連関を示し得るものの、さほど密接な対応は見出せない。また七番右と八番右との関連もないといって宜しいであろう。八番左右の対応について、何より見逃し得ぬのは、亡き紫の上に寄せる光源氏の尽きせぬ慕情(八・左)が、寢覚の上生存を知らず、その死を信じて悲嘆のあまり北山に籠ったまさこ君の心(八・右)に相通じているということだろう。右の歌は、まさこ君の歌ではないが、寢覚の上の詠を通じて、その心情を汲み取ることができる。

以上の諸点を整理すると、上図のような対応関係を見ることができるのではなからうか。

川の大將のとは君の、女一の宮思ひかけたる、秋の夕ぐれに、思ひわびて出でて行きたる畫、をかしく畫きたるを、いとよく思ひ寄せらる。しかばかり思し靡く人のあらましかば、と、思ふ身ぞくちをしき」とある。

右は、末尾欠巻部分から寢覚の上の詠。讓位後の冷泉院は、寢覚の上への果たせぬ恋に悩み、加えて大皇の宮の奸計もあつてか、寢覚の上は、白河院で全く身をしのぶ状態にあつたらしい。家族にも逢えず、わが身の不幸を嘆く秋七月の頃。なお『風葉和歌集』巻四、秋上(三九)に詞書「しのびて白河の院に侍りけるに、もの思ふ秋はあまたありしかど、いとかうはあらざりきかし、とながめわびて」として入集、結句「秋の初風」とする。

まず八番左と九番左とを検討すると、

一、「秋」「七夕」「露」(八・左)に対応して、「秋の夕べ」「露」「秋風」(九・左)と類似している。

一、亡き紫の上を偲ぶ源氏の心(八・左)に対して、女一宮を恋慕しつつ、遠く大君等に寄せてきた想いを反芻する源氏(九・左)。

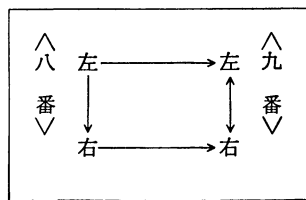
といった点に気付くが、散佚『芹川』物語の内容によっては、もっと近しい共通項が見出せるのかも知れない。

この作品は、『芹川大將物語』の主人公たる、芹川大將の息男、とは君が、女一宮に心を寄せた」(古典文学大系『源氏物語』、山岸徳平氏)とも、『とは君物語』の女一の宮に『せり川物語』の大將が思いをかけた」(『源氏物語評釈』別巻一、昔物語の構成、玉上琢弥氏注)物語とも考えられ、定かではない。その男女の関係が、あるいは光源氏・紫の上と相似たところがあったのかも知れない。

つき、八番右と九番左との関係は、「秋」という季節の共通性のほか、強い関連はないように思われる。むしろ八番右と九番右についてみると、

一、ともに、末尾欠巻より寢覚の上の歌。

一、季節は秋。



一、いわゆる寢覚の上偽死事件によって母の死を信じて疑わず、悲嘆のあまり北山に籠ってしまったまさこ君を思ふ寢覚の上の心情（八・右）に対して、院・大皇の宮の奸計によってか、白河院を脱出ならず、まさこ君ら家族への思いに悲しむ寢覚の上の心（九・右）。散佚した物語本文ではその順序が逆であったかも知れないが、ともに子を思ふ母の情愛。

という強い共通項を持っている。以上の点から、八番右→九番右ということは動かしがたいであろう。

最後に九番左右については、「秋の夕べ」「思ひわびたる」「萩の葉」「秋風も夕べぞ」（九・左）等に対して、「夕暮」「しをれわび」「萩の葉」「秋の夕風」（九・右）と対応している。

結局、八番左から九番左への対応、および八番右から九番右への関連があるように思われる。一応、上掲の構図にしておきたい。

つぎに十番の番い。

左 兵部卿の宮、右の大臣に通ひ給ひてのち、上に対面して、静かなる夜の気色、昔に通へる御気色を、え忍びあへず、御簾のそばより袖を引き寄せて、くやしと思ひわたる心の内をもらし出でてもかひなきものから、人目のあいなきを思ひかへして、立ち出でて翌朝に

右大將

いたづらに分けつる道の露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

右 年久しく絶えてのち、めぐり逢ひ給へる秋、月の光・虫の声もただ昔ながらの心地して、石山にて、住み果つまじき契りなりけむと聞こえしほど、別れ給ひし夜の心地思し出でられて、なかなか心尽くしもや、やたちまきるに、人やりならず涙にくれて

関 白

かぎりとして命をすてし山里の夜半の別れに似たる空かな

左は、宿木の巻から薫の歌。匂宮が夕霧右大臣の六女と結ばれ、一人寝の続く中君は、宇治に戻りたい由を薫に消息する。翌夕訪ねた薫は簾中に通され、彼女の袖を捉えて苦衷を訴える〔五〇〕が強いて自制、早晩に帰邸するものの、恋情に苦しみ、中君のもとに文を通わせる〔五三〕条。なお『風葉和歌集』卷十六、雜一（二〇四）に、詞書「うちの中の君のもとにて、曉近くなるまで物語し明かして、あしたにつかはしける」として入集する。『風葉集』詞書に比べて、『十番』左の場合は、物語本文をみごとに要約して、その情感を巧みに際立たせている。

一方、右は中間欠巻部分から男君（当時は大納言）の詠。物語第六年、寝覚の上（当時は中君の時代）十八歳。男君の叔父左大将（のち老閑白）の求婚を受け、父入道の強い意志を知った彼女は絶望し、一方、悲嘆に暮れた男君も、西山（詞書中の「石山」は誤り）の彼女のもとに忍び、よろず訴えて四、五日間を過ごす。九月末、有明月の残る頃の密会だったろうと推測する向きもある。右の詞書の場合も、今は散佚した物語本文をみごとに要約し、男女の別れ、その心情を鮮明に表出させたといつて宜しかろう。

九番左と十番左とを対比してみよう。

一、ともに薫の歌。

一、「秋の夕べ」「露ふき結ぶ」「秋風も夕べぞ」（九・左）に対応する「露しげみ」「秋の空」（十・左）なる語。

一、揺れる男心というべきか。女二宮を妻としながら、女一宮に惹かれる薫の心情（九・左と、匂宮の妻なる中君に、なお執着する彼の心（十・左は、ともに同類のものである。ただその粘着度にはいささか差異がある。

ともあれ九番左→十番左への流れは認めておきたい。つき、九番右と十番左に関しては、「秋」という季節は共通するが、家族に逢えぬ嘆きに沈む女君（九・右と、中君への思慕に苦悩する薫（十・左とは、さほど深い関連は見出せない。同じく、九番右と十番右についても、「秋」は同じだが、両者に流れる心情は、それぞれ別趣のも

のがある。十番左右について見ると、

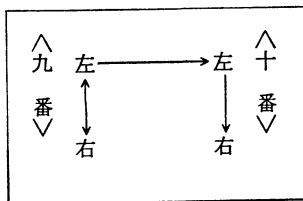
一、折から秋の風物は、こよなく共通している。

一、中君に寄せる薫の切ない慕情と別れの淋しさ(十・左は、中君結婚を前に、男君の恋慕や別離の悲傷(十・右)と相通じ、両物語の中では、ハイライト・シーンの一つであった。想像するに、『夜の寢覚』中間欠巻の該当部分では、十番左に相当する物語本文のように、景情一致、情趣纏綿たる名文が綴られていたに違いない。

一、この夜の出逢いが、いわば二人の男の、人生を切り換え得る一つのチャンスでもあり得た。結局、おのが本性から、自制するに終る薫(十・左、同じく、強引に略奪結婚までは成し得ない男君(十・右)の性格。

といった対応が著しい。顔唐詩人の定家が決して見逃さない思慕と別離のシーンは、月光とすだく虫の音に綾なされて、すぐれた詞書の要約をもって、みごとに対応させられたといえる。

以上十番左→十番右と考えたい。



八

十一番の番いは、次の通りである。

左 柏木^{かしは}の権大納言、起きてゆく空^{そら}も知られぬ東雲^{しのぐも}にいつこの露^{つゆ}のかかる袖^{そで}なり、とうれへ聞こえける返^{かへ}

二品内親王 朱雀院第三

明け暗^くれの空^{そら}にうき身はきえなむ夢^{ゆめ}なりけりと見てもやむべく

右 寢覚のなげきのはじめ、暁の別れに、世に知らぬつゆけさなりや別るれどまたいとかかる暁ぞなき、と侍りける返し

民部卿室

白露のかかる契りを見る人もきえてわびしき暁の空

左は若菜下の巻、女三宮の歌。紫の上の病い篤く、源氏の憂慮深まる中、柏木中納言は彼女女三宮に愁訴、激情の果て理性を失う。思わぬ過失に悩む女三宮、あわただしく別れを告げる柏木、時に四月十余日ばかりのこと。物語本文に、「のどかならず立ち出づる、明けぐれ、秋の空よりも心づくしなり。おきて行く空も知られぬあけぐれにいくの露のかかるそでなり、と、ひき出でて憂へ聞ゆれば、出でなむとするにすこし慰め給ひて」とある。柏木の歌の第三・四句に異同が見られる。

一方、右は卷一から対の君（当時）の詠。但馬守の三女と誤認して、九条での一夜、婚約者の妹中君と契った男君（当時は権中納言）は、有明け月にまぎれて立ち去る折、中君の侍女対の君と歌を交わす。多分、三女の姉だろうと思ひ、今後の交渉をうながす条。時に七月十七日の早暁、物語本文には、「たちかへりつゝ、なげきやすらはるゝほど、月もいりぬべし。よにしらぬ露けさなりや別るれどまたいとかゝる暁ぞなき、いたく思ひ乱れ、独りごちたるけはひの、なめならずなまめかしきも」とある。

いま十番左と十一番左とを比べると、

一、季節こそ違え（十・左は秋の空、十一・左は四月中旬）、「露」「袖」の共通語が見られ、折からの時間帯も「夜深き朝」であつた（なお十一番左に関する物語本文に「明けぐれ、秋の空よりも心づくしなり」とある）。

一、ともに暁の別れであつた。

一、中君への恋情もだしがたく、ようやく理性に支えられた薫の揺れる心情（十・左は、不慮の過失を悔いる女三宮と、自責の念にかられながら宮を恋う柏木の心情（十一・左）に、よく対応している。

一、ともに両者は不倫の恋であつた。

一、十番左の場合、歌の贈答には至らぬが、薫の歌に対して、「うけたまは承りぬ。いとなやましくて、えきこえさせず」と、中君は返事をしている。十一番左は、女三宮の歌の前に、贈歌「起きてゆく」（詞書の中にある）と柏木の詠がある。

などの諸条件が対応しており、十番左→十一番左と考えられよう。一方、十番右と十一番左の關係は、

一、季節こそ異なれ、「涙にくれて」「空」（十・右）と「露のかかる袖」「空」（十一・左）とは、「涙の別れ」の情で照応している。

一、「かぎりとして」（十・右）なる男君に対して、改作本「夜の寢覺」のように、この個所には中君の歌も当然あつたと覺しく、ついては、十一番左の贈答歌の構成と一致する。

一、老閑白の存在を前に、義兄の男君と悲痛な別れを嘆く中君——この男女の構図は、源氏の蔽たる存在を恐れながら、不倫の恋に苦悩する柏木・女三宮の仲に通じ合う。

以上の対応を見るに、十番右→十一番左の関連も無視し得ないであろう。つぎ、十番右と十一番右をみると、一、ともに秋の早暁の別れ。

一、「別れ」「涙」「白露」「空」など、同傾向の語が見られる。

一、十番右の詞書「石山にて——」は、考証の末、「西山」の誤写であろうとするが、或いは定家の錯覚で、「石山」の連想から、即それは男君と中君との最初の出逢い——九条の一夜のことが脳裏に浮かび、十一番右へ結びついたものか。

などの関連が見られよう。十番左と十一番右との対比では、「暁の別れ」「空」など類似しているが、場面描写における薫の心情（十・左）と男君（歌は對の君のものだが）の心情（十一・右）との間には異差があつて、兩首の關係は、

さほど積極的なものはないといえよう。最後に、十一番の番いに触れよう。

一、季節こそ違え、早晩の別れ。

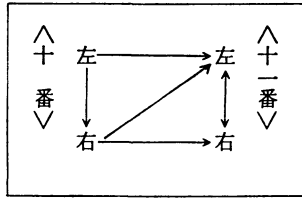
一、「露のかかる袖」「明け暗れの空」「うき身はきえなむ」(十一・左)に対して、「なげき」「暁の空」「白露のかかる契」「きえてわびしき」(十一・右)など、同趣の感情が流れている。

一、ともに贈答を詞書の中に取り込んでいる

といった対応を見出せよう。

以上のことから、上図のような複雑な対応を考えておきたい。ともあれ、十番左右から十一番左右にかけて、物語に対する定家らしい志向の溢れ出た一面を感じ得せしめられ、詞書の作り

方ひとつにも神経の細やかさが注目される。



ついで十二番の番い。

左 なれける袖の移り香を、と侍りける御返し

兵部卿の宮の上

見なれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかけはなれなむ

右 関白、一品宮に参りそめ給ひける日、思ひなげき給へるをなぐさめて、よしや君ながき契りは絶えせじ

を命のみこそさだめがたけれ、と侍りければ

姉上

たえぬべき契りにそへて惜しからぬ命をけふにかぎりてしかな

左の歌は宿木の巻にあり、中君のもの。十番左の場面に続く。中君への情炎に苦しむ薫は匂宮を羨ましく思うが、一方の匂宮は、中君に残る薫の移り香を怪しみ、二人の仲を疑って中君を責める〔五七〕条。物語本文に、「いとね

たくて、『また人に馴れける袖のうつりがをわが身にしめてうらみつるかな』、女は、あさましくのたまひ続けるに、言ふべき方もなきを、いかがは、とて』とあり、中君の歌に続く。

右は中間欠巻から大君の歌。物語第九年か、時に大君二十六歳ほど。老関白は中君を熱愛、次第に姉妹の仲は回復してゆく。翌々年の夏は五月雨の頃か、男君は満たされぬ心を慰めようと、故中務卿の姫君に言い寄ったり、秋、ついに淋しさに堪えかねて、朱雀院の女一宮の降嫁を願い出て許される。時に懷妊の妻大君は深い憂いに沈んでしまう。男君と妻大君との贈答をめぐるこの場面の背景には、『源氏物語』須磨の巻にて、源氏が紫の上と訣別する折の

「いける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな
はかなし」

など浅はかに聞えなし給へば

惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしがな

げにさぞ思さるらむ、と、いと見棄て難ければ、明けはてなばはしたなかるべきにより、いそぎ出で給ひぬ。

なる情感がこめられているであろう。なお『無名草子』本文に、「大将、女一の宮へ参り給ふ折、姉上、絶えぬべき契りに代へて惜しからぬいのちを今日に限りてしがな、とて、とどめもあへぬ涙の気色けしきなどこそ、いとほしけれ」(引用は新潮日本古典集成『無名草子』桑原博史氏に拠る。以下同然)とあり、第二句に異同が見える。

十一番左から十二番左へ。

一、「袖」「かけはなれなむ」「うき身はきえななむ」など、共通した語を含む。

二、ともに詞書に贈歌を記し、その返しの歌である。

一、柏木との不慮の過失を悔やむ女三宮の心の痛み(十一・左)に対して、薫との仲を疑う匂宮の責めに苦しむ中

君の心(十二・左)。ともに共通して女君たちの心は痛ましい。

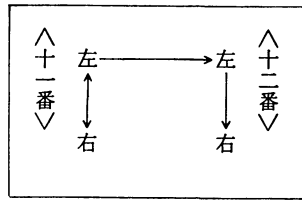
十一番右と十二番左との関係は、詞書に贈歌を含む点は共通するが、本質にかかわる深い対応は見られない。十一番右と十二番右との対応も、両者の間に、「なげき」「契りなど」の共通した語が見え、また、ともに詞書に贈歌を持つが、物語展開の上で、より密接な因果関係はない。十二番の左右については、

一、ともに詞書に贈歌を含む。

一、薫の存在が災いして、夫匂宮の猜疑心(さいぎ)に責められ、夫婦の仲の危機を愁(うれ)うる中君の心(十二・左)に対応して、女一宮に嫉妬して夫との仲に絶望する大君の心情(十二・右)は悲惨である。「かばかりにてやかけはなれなむ」(左)・「命をけふにかぎりてしがな」(右)と、二人の心の叫びはいたましい。

との照応を見出し得よう。十二番左→十二番右の対応とみたい。

以上、十一番から十二番にかけての対応関係は上掲のようになるのではなからうか。



九

十三番は

左 尚侍(内侍のかみ) やがてきえなばたづねても、と侍りければ

いづれぞと露の宿りをわかむ間に小笹が原に風もこそ吹け

右 院の御気色よろしからで、女宮具し奉りて、冷泉院に渡らせ給ひにけるのち、右大将、白河の院に参

りて、空しくたちかへるとて、私にだに忘れ給ふなよ、と侍りければ

嵐吹く浅茅が末の白露の消えかへりてもいつか忘れむ

女三宮の中納言

となつてゐる。左は、花の宴の巻から源氏の歌。二月二十日余りの日、観桜の御宴が催され、源氏・頭中将たちが舞を奏し詩の披露がある。その夜半、源氏は弘徽殿の細殿で朧月夜の君と逢う〔二〕。女の歌「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」に対する返し。この後の展開は、五番左の場面となる。

右は、末尾欠巻から、女三宮の侍女中納言の君の歌。三位中将に昇進のまさこ君は、承香殿女御腹の女三宮と相愛の仲。それを察知した冷泉院は、立腹してまさこを勘当、急ぎ白河院から宮を引き取つてしまふ。事情を知らず、白河院に女三宮を訪ねたまさこ君は、侍女の中納言の君から、その訳を教えられ悲嘆にくれる。『風葉和歌集』卷十七、雑二（二三〇九）に、詞書「右大将、冷泉院にかしこまること侍りて、出で来にけるに、忘るな、と申しければ」として入集している。また『無名草子』に、

何事よりもいみじきことは、まさこと女三の宮との御問とこそ。院の勘当にていとはしたなき折、中納言の君に逢ひて、

吹き払ふ嵐にわびて浅茅生に露残らじと君につたへよ

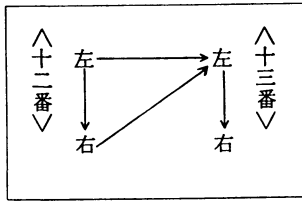
と宣へば、中納言の君

嵐吹く浅茅が末に置く露の消えかへりてもいつか忘れむ

など言ふほどのことまで。

とあり、歌の順序が逆転している（十四番右を参照）が、『無名草子』作者の誤りであろう。なお石川徹氏は、この一件について、

おそらく院は真砂君に、女主人公との仲の執り持ちを強く要請されたのであろうが、母の苦悩を見ては、真砂君は、院のおいつけに従えなかつたに違いない。幼ないうちはやむを得ないと思つてお許しになつてゐた帝だが、もはや成人した真砂に対しては厳しく、遂に目通りを許されず、御所への出入りをお差し止めになつたので



あろう。そのため、院と同じ御所に生活して居られる女三宮とは会えない仕儀となった。結果的に偶然真砂と女三宮との恋愛は仲を引き割かれることになったと思われる。院が二人の関係を憤られたとする旧説は、事実と相違していたように思う。

と注しておられる^四。今後、改めて検討してみたい。さて、十二番左と十三番左との対応を見ると、

一、ともに詞書に贈歌の一部を含む。

二、二人の仲の絶えるを恐れる心情。

といった共通性を見出し得る。つきに、十二番右から十三番左への方角を見ると、

一、ともに詞書に贈歌（またはその一部）を含んでいる。

二、「命のみこそさだめがたけれ」「惜しからぬ命」「かぎりてしがな」（十二・右）に対して、「やがてきえなば」「露の宿り」（十三・左）など、命はかなさを示す語の類似性。

一、二人の仲のほかなき縁の途絶えを嘆く心情。

に、それぞれ対応性を見出したい。十二番右と十三番右を比べると、大君の絶望の叫び（十二・右）に対して、まさしく君を励ます中納言の君の詠（十三・右）で、とりたてての対応は認められない。十三番左右の対応は、

一、「露」「小笹が原」「風」（十三・左）に対する「白露」「浅茅が末」「風」（十三・右）の語が示される。

一、詞書に「やがてきえなば」と贈歌の一部を含み、「と侍りければ」で受けている（十三・左）のに対して、同じく詞書の、「私にだに忘れ給ふなよ」（贈歌の一部ではないが、『風葉和歌集』入集の詞書にも「忘るな」とあり、何か本来のそれに類似した歌の一部であったのかも知れない）を受け

て「と侍りければ」(十三・右)とある。

一、仲の途絶えを恐れる朧月夜の君を支えようとする源氏の姿勢(十三・左)に対して、絶望するまさこ君を励ます中納言の君の態度(十三・右)は、よく対応している。

以上のことから、十三番左→十三番右と考えて問題はなからう。結局、十二番・十三番の関連は、前頁の図のようにみておきたい。

十四番の番に移る。

左 御息所かくれてのみ、内より、宮城野の露ふきむすぶ木枯らしに、と仰せ言ありければ

桐壺更衣母

荒き風ふせぎしかげの枯れしより小萩が上ぞしづ心なき

右 中納言の君、きえかへりてもいつか忘れむ、と聞こえける返し

右大将

左は桐壺の巻から、桐壺更衣の母の歌。秋の一夜、靱負命婦が勅旨を奉じて、亡き更衣の母を訪ねる(八)。帝の詠に「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(第三句に異同がある)とあった。命婦が持ち帰った母君の文を見て悲嘆する帝を描いた(九)条。

右は末尾欠巻から、まさこ君の歌。十三番右の受けであり、『風葉和歌集』卷十七、雑二(一三二〇)に、詞書「かへし」として入集、ただし第三句「つれて」とする。また『無名草子』評言についても前述の通りである。

順序に従って、十三番左と十四番左とを比べると、

一、「露の宿り」「小笹が(原)」「風」(十三・左)に対する「露ふきむすぶ」「木枯らし」「荒き風」「小萩が

(上)「(十四・左)など、同趣の語が見られる。

一、ともに詞書に贈歌の一部を含む。

一、仲の途絶えを恐れる朧月夜の君を支える源氏の詠(十三・左)に対し、更衣亡きあと、若宮を思う帝と母君との心の交流(十四・左)。

といった対応が見られる。十三番右と十四番左に関しては、

一、「嵐吹く」「白露」「消えかへりても」(十三・右)に対する「荒き風」「枯れしより」「露」(十四・左)など、同類語が見られる。

一、「私にだに忘れ給ふなよ」(十三・右)に応じた歌の構成と、同じく贈歌の一部を詞書に含んだ(一四・左)歌の構成。

一、女三宮との縁切れを憂うまさこ君を支えようとする侍女中納言の君の心情(十三・右)に対する、更衣亡きあと、若宮をめぐる帝と母君との心の交流(十四・左)。

と、よく対応関係にあるといえよう。十三番右と十四番右については贅言^{ぜいげん}を要すまい。既述したように完全な贈答歌である。十四番左右の関係は、

一、「露」「ふきむすぶ」「木枯らし」「荒き風」「かげの枯れし」(十四・左)に対して、「露」「吹きはらふ」「嵐」「露のこらじ」(十四・右)などの語。

一、ともに詞書に贈歌の一部を含む。

一、桐壺帝に対して、若宮の将来を訴える母君の切なる心情(十四・左)と、女三宮に対する仲の途絶えを、絶望的に中納言の君に訴えるまさこ君の心(十四・右)との間には通じ合うものがある。

などの諸点を見出すことができよう。十三番と十四番との対応関係を総合するに、何といっても強力なのは、十

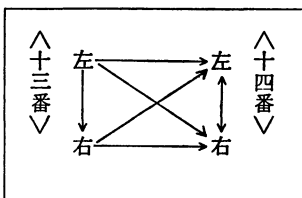
三番右と十四番右とが、物語本文の上からも（末尾欠巻の部分であり、物語上に現存本文はないけれども）、完全な贈答歌の関係にあることだろう。ただし、十三番左→十四番左、また十三番右→十四番右の対応もやはり無視し

得まい。

なお、十三番左と十四番右との対応に触れておきたい。一般に歌合の場合、左方を上位に置くことは、今更いうまでもない。さて、過去、一番から十二番までのケースでも、前番左から後番右への連関は、まず問題にすべき対応関係が見られなかった。ただ十三番左と十四番右の対応に限っては、

一、「きえなば」「露の宿り」「小笹が原」「風もこそ吹け」（十三・左）に対して、「きえかへりても」「露のこらじ」「浅茅生」「吹きはらふ嵐」（十四・右）という対応が見られる。

一、詞書に贈歌の一部を含む。



一、朧月夜の君との仲を結び続けようとする源氏の願い（十三・左）と、女三宮との縁を途絶えさせまいと悲願するまさこ君の心情（十四・右）。

といった共通性を見出し得る。当然ながら十四番右は、十三番右から、より直接的に引き出されたものではあるが、結果的に、それは十三番左とも、よく照応していた、ということになるのであるのか。

一〇

十五番は

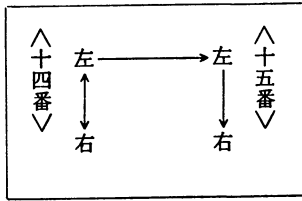
左 葵^{あひ}の上^{うへ}かくれ給^{たま}ひにし、九月九日、菊^{きく}につけてさし置^をかせ給^{たま}ひける
人の世^よをあはれと聞^きくもつゆけきにおく^をる袖^{そで}を思^{おも}ひこそやれ

前坊御息所

右 白河しろかはの院よりあながちに逃のがれ出いで給たまへるを、はじめて聞きかせ給ひて、つかはしける御文みふみに
見みしままの夢ゆめのうちにぞまどはるるたちおくれにし身みをうらみつゝ、 中宮

となつてゐる。左は『源氏物語』葵の巻、六条御息所の歌である。葵の上の容態が急変して逝去(三二)、悲嘆にくれる源氏と左大臣が、続経する「深き秋の、あはれ勝^{まさ}り行く風の音、身にしみける」頃、六条御息所から消息がある。物語本文に、「菊の気色ばめる枝に、濃き青鈍^{あそにび}の紙なる文つけて」(三八)と記されている。なお、八月司召除目の夜に葵の上が急逝、二十日余日の送葬であるが、物語本文に「九月九日」という日取りはない。

右は『夜の寢覚』末尾欠巻から中宮（もと石山の姫君）の歌。九番右「しをれわび」からの続き。窮地に陥った寢覚の上は、何物かの力によって急死、また蘇生する（いわゆる寢覚の上偽死事件）という非現実的な秘法によって、白河院から脱出するを得た。四、五句は、石川氏注に「ヒロインがすでに尼になっていたのだろう」¹⁰⁴とある。さて、十四番左と十五番左とを比べると、



一、季節は、ともに秋。

一、「露」「枯れしより」(十四・左)と「つゆけき」「おくるる」(十五・左)と、似通った表現がある。

一、桐壺帝に対して、更衣の死を歎く母君の心（十四・左）に対して、葵の上の死を悼み、源氏に同情する御息所（十五・左）。

などの共通点を見出すことができよう。ついで十四番右と十五番左との場合、一、ともに季節は秋。(まさこ勘当の時期について小松登美氏は、物語第二十二年晩秋とされる)⁽⁵⁴⁾

一、「きえかへりても」「露」「のこらじ」(十四・右)に対して、「つゆけき」「おくるる」(十五・左)なる語。などの共通項は見出せるが、物語の展開の面では、女三宮との仲を断たれたまきこ君の悲嘆(十四・右と、葵の

上の死を悼む御息所の詠(十五・左)と、両者にそれほどの緊密性はなからう。十四番右と十五番右との間には対応性なく、十五番左右を比べると、

一、ともに秋の出来事。

一、葵の上の真死(十五・左)に対して、一時は母寢覚の上の死を信じて疑わず、悲嘆にくれた中宮の心情を忖度する(十五・右)

といった事情がある。以上の諸条件を総合的に判断すると、前頁の図のような対応を考えて宜しいのではなからうか。

十六番をみると、

左 桐壺の御息所かくれてのち

故院御製

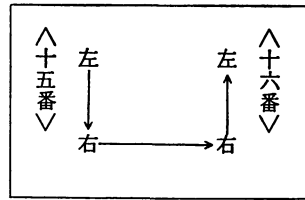
たづねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこ知るべく

右 中宮より、たちおくれにし身をうらみつづ、と侍りける御返し
雲の波へだつる空にただよへど君に伝ふる幻もなし

とある。

左は桐壺の巻から帝の詠。靱負命婦の復命、亡き更衣の母君の歌(十四・左)を受けて、「御装束一領、御髪上の調度めく物」を手にした帝は、「なき人の住処尋ね出でたりけむ、しるしの釵ならましかば」(九)と思われる。

右は、末尾欠巻から寢覚の上の歌。十五番右を受けて、母君生存を知って喜びの歌を贈った中宮に対する「返し」。その頃、寢覚の上は世間にはおのが生存を秘しながら、主人公関白やまさこ君たちとも会って、心慰められる日々を送っていたか。歌の中の「幻もなし」は、方士・幻術士の居なかったことを指す。さて十五番左と十六番



左とを比べると、確かに、季節はともに秋。死別を題材にしているが、むしろ十四番左と十六番左とが対応しているというべきであろう。十五番右と十六番左との対応は見られず、十五番右から、十六番右に対する関連は、相互の詞書を読むまでもなく、末尾欠巻におけるその個所の物語本文は一貫していたであろう。十六番の番いは、ひとえに「幻」(方士・幻術士)の発想につながるものであろう。白河院を脱出するまで、いかなる方策にても、おのが生存を中宮に知らせ得なかった寝覚の上の苦衷——楊貴妃の魂の在抛を求め得た方士の存在。まこと長恨歌の話は羨しかったであろう。即それは桐壺帝の願望でもあった。

こうした見地から、十五番右と十六番右との対応を第一義的に捉えるべく、上掲図のような関連を考えておきたい。

十七番の番いに移る。

左 須磨の浦へ思したちし頃、院の御墓に参らせ給ひて

なきかげもいかが見るらむよそへつづながむる月も雲がくれぬる

右 母上かくれ給ひぬと聞こえし時より、北山にこもり居て、つぎの年の春、桜につけて中宮に

右大将

知らざりし深山がくれの花の色をあはれ昔と泣く泣くぞ見る

左は、須磨の巻から源氏の歌。退京(三月二十日余日)を前に、源氏は桐壺院の御陵に参拝する。物語本文は初句「なきかげや」とする。なお『風葉和歌集』卷十七、雑二(二七八)に、詞書「須磨にうつろはせ給はんとて、故院の御墓に詣で給へるに、月も雲がくれて、森の木立木ぶかく、帰り出でん方なく思されて」として入集、第二句

「いかにみるらん」とする。

右は末尾欠巻から、まさこ君(右大将)の歌。母寢覚の上の死を信じて疑わないまさこ君は、悲嘆のあまり北山に籠ってしまった(八番右の場合)が、偽死事件のあと白河院を脱出した寢覚の上は、その生存を中宮に連絡(十五・右、即それは中宮の返しとなった(十六・右)。こうして世間には生存を秘しながら、彼女は主人公閑白と対面、泣き笑いみの日々。時に、北山に籠っていたまさこ君へも、母生存の報は、中宮を介して届けられたのではなからうか。季節は春三月ごろの事であったか。ここに、十五番—十六番—十七番と、定家は物語展開に即して、歌を選んだものと理解したい。ただ『風葉和歌集』には、巻九、哀傷(六二三)に、詞書「母の思ひにて、北山に籠り居て侍りけるころ、花を折りて中宮に奉るとて」として入集、なお結句を「なほそみる」とするのは誤脱であろう。十六番左と十七番左を比べると、

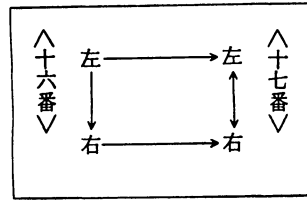
一、季節こそ違え、「月は入方の空清う澄み渡れる」頃、折から弘徽殿女御は、「月の面白きに、夜更くるまで」管弦の宴を開いていた秋の夜(十六・左と、「月まち出でて」山陵に詣で、終夜額づく光源氏。折から「月も雲隠れて、森の木立木深く心すご」き春の夜の思い(十七・左)。

一、亡き更衣を尋ね得る手立てもがたと願う桐壺帝の心(十六・左)に対して、月によそえつつ、亡き父桐壺帝の魂を尋ねたい源氏の心情(十七・左)。

一、「かくれて」「幻」「魂のありか」(十六・左)に対する「なきかけ」「雲がくれぬる」(十七・左)の語。

といった類似点を見出すことができよう。十六番右と十七番左との関係は、右が寢覚の上生存に関する、いわば歓喜の情を写す場面なのに対して、左の歌は源氏の沈淪に関する悲嘆の場面であり、その意味で強い対応性はなからうと判断する。

十六番右と十七番右との関連は、前述した通り、いわゆる偽死事件のあと、白河院を脱出し得た寢覚の上が、ま



ず中宮にその秘密を明かし、中宮を通じてそれは、母の死を歎いて北山に籠っていたまき君に通報された。こうした物語本文（散欠してはいるが）の一貫性を想定する時、定家は、『夜の寝覚』物語のうち、第四部の該当個所に、相当の関心と興味を抱いたものと推察できよう。考えてみれば『後百番歌合』から『夜の寝覚』二十首を抜き出す折、定家は、いわゆる末尾欠巻に該当する個所（物語の第四部）から計十首、つまり歌の半数に及んだという事実は十分注目に値しよう（ただ十七番右の歌が、『風葉和歌集』には哀傷の部に入集されている点は少し気がりではある）。

十七番の左右を見ると、季節はともに春三月の頃、また、かねて母寝覚の上の死を信じて疑わなかったまき君の心（十七・右）と、亡き桐壺院の山陵に額づく源氏の心（十七・左）。ともに「死」に関係する場面ではあるが、それぞれ十六番左右からの関係から一応の番いになったものではないだろうか。よって上図のような対応関係を考えておくことにする。

二

十八番は

左 齋宮群行日、また百敷の内を見給ひて、前坊の御時、父大臣のことなど思ひ出でて 前坊御息所

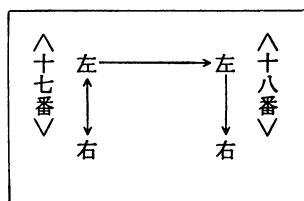
そのかみをけふはかけじと思へども心のうちにもぞかなしき

右 尚侍入内の時そひ奉り給へるに、内の上、君ももし昔忘れぬものならば同じ心に形見とも思へ、と

の給はせたる御返し

百敷を昔ながらに見ましかばと思ふもかなし倭文の苧環

とある。左は、賢木の巻から六条御息所の歌。伊勢に下ろうと決意した御息所は、野宮を訪ねた源氏と和歌の贈答



のあと齋宮と参内、時に九月十六日のこと(九)。前坊の御時のこと、父大臣のことなど感慨無量、物語本文に、「御息所、御輿に乗り給へるにつけても、父大臣のかぎりなき筋に思し志して、いつき奉り給ひし有様かはりて、末の世に内裏を見給ふにも、物のみつきせずあはれに思さる。十六にて故宮に参り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける」と、御息所の素性が語られる。なお、十四歳の齋宮に対して、「帝御心動きて、別れの櫛奉り給ふ程、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ」とある。

右は、巻三から帝の歌。寢覚の上が付き添って、督の君(故老関白の長女)の入内、翌日帝から後朝の文がある。お気に召して四夜お側に。その間、帝から寢覚の上に文あり(詞書の中の歌)、その返し。十七番左と十八番左とを比べると、①ともに、榮華を尽くした過去の日々への回想を感慨を述べている点が対応しており、それは②須磨・明石沈淪を目前にした源氏の心境(十七・左と、娘齋宮ともども、源氏とも別れ伊勢下向の御息所の心情(十八・左との対応でもある。十七番右と十八番左については、母の生存を知ったまきこ君の歎び(十七・右)と、伊勢下向の御息所の心情(十八・左との間に、さほど関連した対応は見出せない、

十七番右と十八番右との対比を見るに、これまた物語展開の上から、特別な照応関係にはないであろう。十八番の番いを考えると、

一、前坊の御時、父大臣のことなど、過ぎし幸せの頃を回想する御息所(十八・左と、亡き老関白存命の頃、幸福だったおのが身を懐しく思う寢覚の上(十・右)と、二人の心情には明らかな共通性を持っているよう。

一、「そのかみをけふはかけじ」の思い(十八・左)は、換言すれば即「倭文の苧環」繰り返し(十八・右)の歎きであろう。

一、双方の歌に、「ものぞかなしき」「思ふもかなし」の共通語がある。

などの対応が考えられる。以上の点から、十八番左→十八番右と考えられるのではなからうか。このような対応関係を総合してみると、前頁の図のような構成になるのではなからうか。なお十七番右の歌を、『風葉和歌集』が哀傷の部に入集せしめたように、北山籠りのまさこ君が、まだ母寝覚の上の生存を知り得ず、中宮に寄せた哀悼の歌と解すれば、十八番右の「思ふもかなし倭文の葎環」と、ある面に対応する傾向もうかがえるが、今は一応、十七番右の歌の解釈を、前述のような方向で考えておきたい。

あと二番で、『後百番歌合』の「源氏」「夜の寝覚」の番いは幕を閉じる。十九番に移ることにする。

左 八の宮、宇治にこもり居て、年へてのち、右大将、宰相の中將と聞こえしを、御使にて御消息ありし

冷泉院御製

世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲を君やへだつる

右 女君、広沢にかきこもりぬと聞かせ給ひて、内より藏人の少將を御使にて
何事をいかに恨みて白雲の八重たつ峯に思ひ入るらむ

院

左は、橋姫の巻から冷泉院の歌。宇治の阿闍梨が、八宮に仏法を説き、冷泉院にも八宮の事を奏上する(二五)。五十にもなるうという冷泉院は、八宮の姫君たちに興味津々だが、薫(時に宰相中將であつた)は聖だつた生活を送る八宮に心を引かれ、阿闍梨に紹介を依頼した。かくして院の御使が、阿闍梨とともに八宮を訪ねる(二八)条。なお『風葉和歌集』卷十八、雑三(一四〇二)に、詞書「宇治八宮につかはさせ給ひける」として入集、結句「霧やへだつる」とする。

右は卷四から院(当時は在位中)の歌。いわゆる寝覚の上生霊事件のあと、あらぬ噂に苦悩する寝覚の上は、広沢

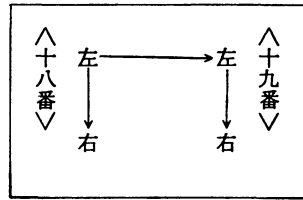
に居を移す決心をする。その間も、まさしく君は帝の執心の文を持参。二児を伴って広沢入りの彼女は、父入道やその妹（もとの斎宮）と対面するが、訪ねてきた男君（内大臣）とは逢おうとしない。その折も折、帝からの文、たまらず男君が無断で開封するくんだり。なお物語本文は第四句「八重たつ山に」、結句「思ひいりけん」とある。この歌は、諸註⁹⁸の記す通り、『源氏物語』浮舟の巻の一節「五八」の

あやにくにのたまふ人はた、八重^{やへ}たつ山にこもるとも、かならずたづねて、われも人もいたづらになりぬべし、
なほ心やすく隠^{かく}れなむことを思へ

に見られる『紫明抄』『花鳥余情』『河海抄』の引く注と関係するものであろう。即ち「白雲の八重立つ山にこもるとも思ひ立ちなばたづねざらめや」（出典未詳）を本歌とする見方である。なお阪倉篤義氏の補注のように⁹⁹、『夜の寢覚』の該当場面は、「この歌（または浮舟の巻の文章）を踏んでいるのであろう」と考えたい。『風葉和歌集』巻十八、雑三（一三七三）に、詞書「山里にまかりけると聞かせ給ひける女に給はせける」として入集、第四句「八重立つ山に」とする。

例によって、十八番左と十九番左の対応を見ると、まず考えられるのは、栄華の夢はかなく娘の斎宮と伊勢下向の御息所の心情——「昔を今になすよしもがな」（『伊勢物語』第三十二段）の絶望感から連想が働いて、政争に破れた上に北の方を亡くし、姫君二人ともども荒廃した宇治の邸内で、寂寥^{せきりょう}の日を送る八の宮が導き出されたのではないか、ということである。そういった物語の基盤に流れる御息所と八の宮の位置づけの共通性を踏まえて、十八番左
↓十九番左と見ておきたい。

十八番右と十九番左もまた「倭文の芋環」の縁につながるが、両者の、より密接な照応は見出せず、十八番右と十九番右との関連も、寢覚の上に対する帝の、変らぬ執心を基盤にしてはいるが、それ以上の何ものでもない。十九番の番いについては、



一、「(宇治に)こもり居て」「御使にて」「八重たつ雲」(十九・左)に対する「(広沢に)かきこもりぬ」「御使にて」「八重たつ峯」(十九・右)の語。

一、ともに院(右の場合は在位中だが)、御使をして消息をつかわし、仏道に専念せんとする者への呼びかけとなっている。

一、時に、八の宮は阿闍梨の勧めから佛道に心を染め、濁世離脱を願ひ(十九・左)、寝覚の上もまた、帝・内大臣との愛執の俗世を捨てて、父入道のもと、清澄の日を願う(十九・右)。といった共通の心情にある。以上のことから、上図のような対応が考えられるのではなからうか。

最後に二十番について見よう。

左 宇治にて身をすてける頃

浮舟の君

なげきわび身をばすつともなきかげに浮き名ながさむことをこそ思へ

(右) 世をそむきてのち、山の帝の御文に、この世にはうくて別れし仲なるをいかに入りにし一つ道なり、との給はせたる御返し

かぎりなくうき身をいとひすてし間に君をも世をもそむきにしか

左は浮舟の巻から、浮舟の歌。宇治では、薫・匂宮の使者が再び来合わせ(六三)、秘密を知った薫は、浮舟を諦めず、警固する。身の破滅迫り来るを悟った浮舟は、苦悩の果て、時に匂宮を恋ひ、時に薫を想って、身の処理は死のみと決意する(八〇)くだり。

右(なお『後百番歌合』に、「右」の表記なし。よって()で囲む)は末尾欠巻から寝覚の上の歌。まさこ君勘当事件によ

つて、意を決した寢覚の上は、山の座主に依頼して院に許しを願う。寢覚の上出家の由がしたためられた文面に触れ、女君安産の由をも聞かれた院は、結局現世にては寢覚の上とまったく添い得なかった仲であつたと落涙する。『無名草子』に、

そののち、まさこのことに思ひ余りて、院に御文奉りたるほどこそ、さすがあはれに侍れ類なく憂き身を厭ひ捨てし間に君をも世をもそむきにしか

と聞えたるこそ、いみじけれ

とあり（歌の初句が異なっている）、また『寢覚物語絵巻』にも、

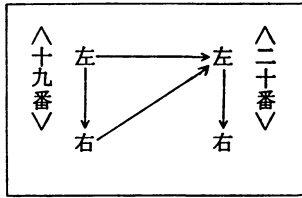
忍びやかなるさまにて、たそがれのほどにぞ参り給へる。事の由申せば、我は内にて御簾の前に召したり……「座主して、一日か、御消息聞こゆる心地せしは、確かなるなめりな」と問はせ給ふ。「しかさぶらふめりき」とて、御簾のもと近く参り寄りて、ふところより、この御文を引き出でて参らせたり。とばかり御覧するなるべし。いたく御声うち変はりて

と、該当場面を描いている。さて、十九番左と二十番左とを比べて見ると、

一、ともに舞台は宇治。

一、この濁世を遁れんとする心

といった共通項が見出せるものの、主たる連繋は、十九番右に付して述べた『源氏物語』浮舟の巻の一節——「八重たつ山にこもるとも」の連想が、十九番左の「八重たつ雲」に及び、その縁から二十番左の浮舟に及んだものではなからうか。ただ、その意味では、十九番右と二十番左との関連の方が、より密接であろう。前述のように、十九番右に見られる『夜の寢覚』の該当場面は、『源氏物語』浮舟の巻の文章を踏んでいると覚しく、その連想が機縁となつて、十九番右——二十番左となつたものではなからうか。なお後述するように、定家は、『後百首歌合』の



『源氏』『寝覚』の場合のほかに、『源氏』『御津浜松』のケース、『源氏』『参河^南左介留』の結番、『源氏』『海人^人荻藻』の結番——と四回にわたって、結番の左方に浮舟の歌を持ち込んでいることは注目に価しよう。またそれは、『物語』二百番歌合』の左方における浮舟の巻の比重に係^かわる。二十番左右については、

一、「浮き身」「うき身」の語の共通は、入水・出家という違いこそあれ、わが身の俗世に対する精算を明示している。

一、ともに物語のヒロインの詠。

一、後日談こそあれ、浮舟にとって入水自殺を願う悲痛な心情——その描写は物語の大きなマ^マ場(二十・左)であり、一方、同じく寝覚の上にとっては、出家によって院と一つの決着をつけた——その記述は末尾欠巻部分での、最も高潮した場面(二十・右)である。

以上、両者は見事に対応しているといえよう。『夜の寝覚』の二十番右の該當場面の直前、山の座主に書を託して、まさき君の勘当のお許しを願った寝覚の上。その生存を知って落涙する冷泉院の姿：残された『寝覚物語絵巻』の第四図は、今にその感慨の情を伝えている。ここに、十九番との対応関係は、上図のようになるのではなからうか。

なお、『後百番歌合』のうち、『源氏』『寝覚』の歌を番えた全二十番の結番で、左が浮舟の巻から選ばれた点について、他のケースを見ておきたい。

『源氏』『御津浜松』を番えた全十五番の結番は、

卅五番 左 宇治にて長雨^{ながあめ}はれぬ頃、大将、水^{みづ}まさるをちの里人^{さと}いかならむはれぬながめにかきくらすころ、と侍^{さむらい}りければ

里^{さと}の名をわが身に知れば山城^{やましろ}の宇治のわたりぞいとど住^すみうき

浮舟^{うきふね}

と、浮舟の巻から収載され、『源氏』『参河爾左介留』全十五番の結番も、

五十番 左 宇治にて身をすてむことを思ひて

からをだにうき世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみ見む

と、同じく浮舟の巻から入集している。なお『源氏』『海人荊藻』を番えた結番―『後百番歌合』百番左も同じ浮舟の巻に拠る。

百番 左 限りに思ひなりける頃、京より母の夢に見ゆとて、おぼつかなきことをいひつかはしたりける返かへ
り事ことに 浮舟うきふね

のちにまたあひ見むことを思はなむこの世の闇に心まどはで

と、実にこの歌は『源氏物語』浮舟の巻の末尾、母君に宛てた浮舟のこの世に残した最後の歌の一つであった。

一一

改めて、『前百番歌合』に採用された『夜の寢覚』など十物語の、それぞれ結番における左方の歌が『源氏物語』の、どの巻から入集されているか整理しておきたい。

表4の通り、十物語のうち四物語（『夜寢覚』『御津浜松』『参河爾佐介留』『海人荊藻』）もの結番左方がすべて『源氏物語』浮舟の巻から、浮舟の歌を入集していることは注目して宜しかろう。加えて、『後百番歌合』の結番―百番左が、締めくくりでもって浮舟の巻の末尾から浮舟の最後の歌となっている。

それぞれ、浮舟の歌を分析すると、浮舟の巻という一つの性格から、当然の傾向ではあるが、

一、自殺後のうき名を厭う情（源氏・夜の寢覚）

一、里の名を憂き身に敷いて（源氏・御津浜松）

左方	夜寢覺	御津浜松	参河 <small>爾</small> 佐介留	朝倉	左毛右毛袖湿	心高幾
右方						

源氏物語		a	b	c
⑦	浮舟	浮舟	浮舟	八六
⑦	浮舟	浮舟	浮舟	五八
⑦	浮舟	浮舟	浮舟	八六
③二三三	惟光	潞標	惟光	
④	紫上	若菜上	紫上	七一
⑤	雲井雁	夕霧	雲井雁	五六

	左方	右方
	a	賢木
b	源氏物語	取替波也
c	② 八十一	露之宿
	a	賢木
b	源氏	末葉露
c	⑥ 三二六	海人薊藻
	a	浮舟
b	浮舟	
c	⑦ 八八	

(1) 第一列は、「後百番歌合」の右方に採用された10物語の物語名。
 (2) 第二列 a は、「後百番歌合」の左方である「源氏物語」のなかで、10物語と番いのそれぞれ結番に見られる入集歌の巻の名を示す。同じく b は詠人名。また c は、その歌の出てくる箇所を日本古典全書本の分冊と頁 (⑦86は第7分冊の86頁) で示す。

一、亡骸をも残さずこの世を（源氏・参阿爾佐介留）

二、恩愛に惑わず来世で再会（源氏・海人荻藻）

のように、愛憎うず巻く濁世を捨てて、入水を図る浮舟の悲痛な心情でばかり染めあげられている。他の物語の場合を見ると、『源氏』『朝倉』の結番左方が、源氏住吉詣の際に、往事を回想して、須磨沈淪の頃の物悲しさを

〔表 5〕

源氏巻別	歌数	源氏巻別	歌数
朝 顔	0	桐 壺	3
乙 女	2	帚 木	2
玉 鬘	0	空 蟬	0
初 音	0	夕 顔	4
胡 蝶	0	若 紫	3
螢	0	末 摘 花	0
常 夏	0	紅 葉 賀	3
篝 火	0	花 宴	2
野 分	0	葵	4
行 幸	0	賢 木	6
藤 袴	0	花 散 里	1
真 木 柱	3	須 磨	10
梅 枝	0	明 石	7
藤 裏 葉	1	潞 標	2
若 菜 上	3	関 屋	0
若 菜 下	2	蓬 生	0
柏 木	1	絵 合	1
横 笛	1	松 風	1
鈴 虫	0	薄 雲	0

詠ずる惟光。『源氏』『左毛右毛袖湿』の場合、女三宮の存在等に煩悶し、飽きられる運命を歎く紫の上の歌。『源氏』『心高き』のケースも、夕霧と落葉宮との仲に嫉妬し、失意の雲井雁。『源氏』『取替波也』の場合も、朱雀帝の寵は深い、源氏との関係絶えぬ朧月夜の君の、心のうめきの詠。『源氏』『露之宿』では、結局、斎宮ともども伊勢下向を決行した御息所に対する源氏の歌。『源氏』『末葉露』の場合も、紫の上の一周忌近く、夏の一日を泣き暮す源氏の悲傷——とそのすべては、いわば「あきからぬ契ながら、世に心づくしなるためし」ばかり、余りにも舞台は暗い。

つぎに、『後百番歌合』に入集された『源氏物語』の歌を、その巻別に数えると、表5の通りになる。一瞥していちべつわかることは、

源民卷別	歌数
夕 霧	2
御 法	1
幻	5
句 宮	0
紅 梅	0
竹 河	0
橋 姫	2
椎 本	3
総 角	4
早 蕨	3
宿 木	5
東 屋	1
浮 舟	8
蜻 蛉	2
手 習	2
夢 浮 橋	0
	100

・第一部(桐 壺)藤裏葉 — 計 五十五首
 ・第二部(若菜上)幻 — 計 十五首
 ・第三部(句 宮)夢浮橋 — 計 三十首

一、『源氏物語』三部構造のうち、第一部から計五十五首。但し計十六帖(空蟬・末摘花・閑屋・蓬生・薄雲・朝顔・玉鬘・藤袴・梅枝)からは一首も入集していない。第二部から計十五首。入集しないは鈴虫の巻だけ。第三部は計三十首。但し入集しないのは、句宮・紅梅・竹河と夢浮橋の計四巻。

一、いま入集しない巻を除外して、その比率を調べると、第一部は十七巻から五十五首、第二部は七巻から十五首、第三部は九巻から三十首となり、ほぼ第一部と第三部とが同率となる。

一、第一部では、須磨・明石の巻からの入集歌が目立ち、第三部では浮舟の巻からの歌が圧倒的である。

一、蜻蛉・手習の巻から二首ずつ、夢浮橋の巻からは入集せず。定家は浮舟失踪後の巻々には、さほど関心を寄せなかったと思われる。

といった特徴であろう。以上、①『後百番歌合』に取られた十物語の、それぞれ結番左方に位置する『源氏物語』の巻名と詠人名、ついで、②同歌合に入集した『源氏物語』歌の巻別一覧表からの、それぞれ総合判断を加え

たが、これらのことは、『源氏』『寝覚』歌合の結番に際して、左方を浮舟の巻から浮舟の歌を入集せしめた定家の意図——“定家的なもの”を探る場合の一助になるのではなからうか。やはり定家は、『後百番歌合』を撰ぶに当って、各十種の物語の結番については慎重な態度で臨み、特に『夜寝覚』二十首、『御津浜松』十五首、『参河佐介留』十五首といったウエートを持つ作品に関して、その結番の左方を、自分の意図的な歌で締めくくったのであろう。そうして、全百番の最後をもおのが趣向もて、改めて『源氏物語』浮舟の巻から、浮舟の歌で結番したのではなからうか。ここに『源氏』『夜寝覚』第二十番の左方に、『源氏物語』浮舟の巻から、浮舟の詠が位置づけられた一つの意図を汲み取りたいと思う。

なお、『後百番歌合』第二十番の番いを検討し終ったところで、樋口氏の分析を参照しながら、『源氏』『御津浜松』第二十一番との関連に触れておきたい。第二十一番は、

左 都にかへり給ひて後、明石の上につか〔は〕しける
なげきつつ明石の浦に朝霧のたつやと人を思ひやるかな

右 渡唐の後、旅寝の夢に、日の本の大將の姫君、たれにより涙の海に身を沈めしはたるる海女となりぬと
か知る、と見えければ

中納言

日の本の御津の浜松こよひこそ夢に見えつれ我を恋ふらし
とある。左は、『源氏物語』明石の巻から、源氏の歌。明石入道一家の悲歎にくれるなかを、源氏は浦を去り帰京

〔三〕、参内のあと故院追善の法華八講を用意する。明石の上には、返る波につけて文をつかわす〔四〕条。

右は『浜松中納言物語』巻一から中納言の歌。父宮転生を知って渡唐する源中納言は、義父左大將の大君とひそかに契りを結ぶ。中納言渡唐のあと懷妊、女兒を出産して大君は出家する（散逸首巻）。夢の中で、大君が悲歎の末

「誰により——」(詞書にある)と歌う、その返し。

二十番左と二十一番左とを比べると、樋口氏も指摘されるように、「なげきわび」(二十・左、「なげきつつ」(二十一・左)及び、「思へ」(二十・左、「思ひやる」(二十一・左)の類似の語が見出される。よって二十番左→二十一番左の連想を認めるべきであろう。二十番左と二十一番左との関連は認められない。二十番右と二十一番右とを比べると、

一、詞書に対応する歌をそれぞれ含む。

一、世を背いた後の女性が詠んだ歌(二十・右は寝覚の上、二十一・右の詞書の中に大君の歌)が共通する。既に樋口氏の述べられるところ。

二、「身」の語が、ともに歌に含まれる。同じく樋口氏既述。

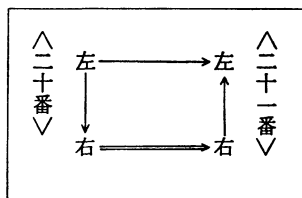
という点で、密接な関連が見られよう。よって、二十番右→二十一番右の連想も否めない。以上、二つの場合を比べると、結論的に、樋口氏の説かれるように、①二十番右歌から二十一番右歌詞書歌がまず連想され、そのあと二十一番右歌が選出されたであろうこと、また、②二十一番右は、新しく右方に配される『浜松』の一番手の歌が据えられるべき位置であるから、物語の主人公の作で、しかも重みある歌を選びたい、という配慮の末、まず想起された「たれにより」の詠を詞書中に記すにとどめ、「日の本の」の歌を二十一番右歌に定めたのであろうこと——の分析は肯綮に当るであろう。二十一番に関しては、

一、ともに物語の主人公の歌。

一、都と明石(二十一・左と、唐土と日本(二十一・右)という、遙かに別れた恋人を思いやる。

一、「明石の浦」(左、「御津の浜松」(右)と、海岸が歌によみ込まれている。

などの共通点を、既に樋口氏が説くところであり、以上の諸条件を統合すると、次の頁に掲げた図のような関連



を見ることができよう。

すでに述べた通り、『後百首歌合』入集の『浜松』歌の場合は、物語の散逸部分に存して明確でない二首を除いて、現存物語における歌の所載順に並べられており、その意味からも、『御津浜松』の書名の由来を示す重要な歌が、二十一番右に位置する、いや定家が位置せしめた意図は十分に察知できよう。

こうして見ると、『百首歌合』から『後百首歌合』に続く場合、『源氏』『狭衣』結番の二首は、『源氏』『寢覚』一番の二首と、それぞれ密接な関連を持つと同時に、『後百首歌合』の一番右方は、その冒頭を飾るに最適な歌で占められ、『源氏』『寢覚』の結番の二首は、『源氏』『浜松』一番の二首と相互に関連を保ち、同時に、『源氏』『浜松』番いの最初の右方も、その冒頭に位置するにふさわしい歌で占められた、ということができるとはなからうか。

結

以上、ここに縷々述べ来たった経過をふまえて、大凡のまとめを考えてみたい。

まず表1から。『後百首歌合』に入集した『夜の寢覚』の二十首の分布状態を見ると、物語巻一から三首、中間欠巻部分から四首、巻三から一首、巻四から二首、末尾欠巻部分から十首となる。それを『夜の寢覚』四部構造の面から分類し、かつ、『風葉和歌集』にも入集された歌数を()に示すと、表6のようになる。

すでに永井和子・鈴木一雄両氏らの説くところ¹⁰⁾でもあるが、改めて藤原定家の趣向の面から、入集歌の分布状況を調べてみよう。

一、四部構造、第一部のうち巻一から三首を採集している。そのうち一首が①物語初出の歌で、かつ改作本『夜

〔表 6〕

		後百番歌合	(風葉和歌集)
I	1	3	(2)
	2	0	0
II		4	(1)
III	3	1	0
	4	2	(1)
	5	0	0
IV		10	(5)

ろうか。ただ、現存五卷本の巻二の部分、本来あった物語の巻二に該当するのからつまり本来の巻二は、現存本の中間欠巻部分と称する個所に、かなり食い込んでいた、との想定も可能であろう。その点、第三番の番いで検討したように、「咲きにはふ花も霞も」の歌は、左大将（のちの老閑白）との縁談が持ち上がる前、すでに姉の夫に想いを寄せ始めた頃の寝覚の上（その頃は中君）を描く、微妙な位置付けを成していたのではなからうか。現存本巻二の範囲に関する限り、女君の、義兄に寄せる思慕の情——この物語の主題にかかわる女君の心理変化は、判然と読み取れないが、第三番右の歌が、本来あった巻二末尾あたりに掲載されていたとすれば、まさに全巻的視野からも注目されるべき一首であつたろう。やはり『風葉和歌集』にも入集されている。

『寝覚』も手を加えなかった、②その歌が、『風葉和歌集』にも入集している——ことは、前述の通り、「八月十五夜」「月」といった定家好みに綾なされた歌であると同時に、『源氏』『御津浜松』第二十一番右が、物語の由来を示す重要な歌で占められたことも併せ考える時、『後百番歌合』作成に臨んで、いかに定家が、その一番左右の歌の選択に熟慮を重ねたか、思い半ばに過ぎるものがある。入集歌二十首の配列は、周知の通り、物語掲載順となっていないが、でも第一番右は物語の最初に詠出された「天の原雲の通ひ路」の歌であつた。残る二首のうち、「こぎかへり同じ都に」（五・右）の歌が、いかほど『夜の寝覚』の主題と構想の起点に深くかわつているか、今さらに贅言を要すまい。それは『風葉和歌集』にも入集された由縁（ゆゑん）でもあろう。

一、巻二から、定家は一首も採っていない点、どう理解すべきであ

一、いま仮りに、三番右の歌が、本来は卷二末尾あたりにあったとして、中間欠卷部分から入集の三首のうち、十番右・十二番右の二首が、それぞれに物語のハイライト・シーンであつたろうことは想像に難くない。その点、定家の選歌態度として十分に首肯されるべきだろう。つまり、四部構造の第二部に關しても、定家の目配りは十分に果たされているように思われる。

一、いわゆる第三部(卷三・四・五)から、わずか三首入集という偏りは、やはり氣にかかる。①卷三に描かれる「帝闖入事件」と、その後の女君自身による心理分析。②卷四に展開する「寢覺の上生靈事件」と、その噂を聞いた彼女の、おのが心理分析。さらに③卷五冒頭に、延々と続く男君の告白と入道太政大臣の陳謝——そのどれ一つを取り上げても、現代の『夜の寢覺』読者を捉えて離さぬものがある。だが、十八番右(卷三)、四番右、十九番右(ともに卷四)の三首それぞれを見ても、以上三点のいずれかに、より深く、より密接にかかわり合う歌とはいえない。鈴木一雄氏は、『無名草子』評言に触れて、

鎌倉初期のこの物語評論は第三部も当然読みこなしていたと思われるのである。第三部を全体としては理解してしながら、そこから各場各景の和歌や感動的場面個々を抽出することはできなかった。まして、「女ひとりの苦しみ」を内面的に追求する作者の心理的な掘起しは一言も指摘することなく、繰り返し繰り返し内へ内へと向かい、そのつど新しい深さを発見している作者の協力はついにとらえ得なかったということであろう。その点からも、やはりこの作品が当時の物語世界にとっての異端ともいうべきものであつたことがうかがえるように思われる。

と述べておられるが、定家もまた、『物語歌合』というワク組みの中で、心理主義を標榜する『夜の寢覺』から二十首を採用するに当って、あえて内面的な——いわば物語歌合にふさわしからぬ、また物語歌合に収り切らぬ——歌を避けたのであろうか。

一、第四部（末尾欠巻部分）から、実に十首もの歌が入集されたことは注目されよう。しかも、うち五首が『風葉和歌集』にも入集されている。細かく見ると、番順こそ異なるが、八番右↓十七番右、九番右↓十五番右、十三番右↓十四番右、十五番右↓十六番右↓十七番右と、それは鎖状につながって、物語展開と対応している。藤原定家にとっては、「寝覚の上偽死事件」と「まさこ君勘当事件」をメイン・テーマとした第四部の展開こそ、おのが趣向に適した恰好の題材であったのだろうか。

こうして、『夜の寝覚』四部構造の見地から、『後百番歌合』入集の二十首のばらつきを考えた場合、一つは、藤原定家という一人の歌人の、強烈な個性に拠る採歌基準を想定し得るが、いま一つは、いわば黙読に適した物語『夜の寝覚』の心理描写を前にして、物語としての味わいそのものを、「物語歌合」という、あるワ、ク、組みの中へ、詞書・詠人名ともども、いかにうまく封じ込めて、二十首の中にただよわせ得るか―それは、いかにも至難な技であつたろう。

表2については、すでに表4・5ともども、『源氏物語』浮舟の巻を中心に、『後百番歌合』の『源氏』『寝覚』の結番を考察する折に触れた通りである。

最後に、以上を総合した表3に関連して一言添えておきたい。一番左右から二十番左にわたって、相互の連鎖反応を、計四十首について調べてみた。確かに『源氏』『浜松』の場合と異なつて、『源氏』の歌も『夜の寝覚』の歌も、ともに物語における歌の掲載順序とは無関係に配列されている（ただ、前述のように、十三番右・十四番右と、十五番右・十七番右、の場合は、物語の順序になっているらしい）が、『物語歌合』として、『源氏』『寝覚』それぞれの番いは、まことに巧妙な対応関係を示している。そこには、随所に“定家的なもの”を読み取ることができる点も既述の通りである。前番の番いが完全な並列かつ対等的な対応の場合、↑↓で示さざるを得ない（歌合という形式上はあくまで左が右より上位にあるのは当然だが）とともに、前番左が後番左に、前番右が後番右に、それぞれ対応する場

合もまた、後番の左右は↑↓となる。時には十三番、十四番との対応のような、複雑極まる関連を示す場合も見られたが、主導権の大勢は、やはり『源氏物語』側にあったように思われる。ただ、こうした計二十番の対応を分析する場合、左右に番えられた二首の歌が、①『後百首歌合』の表記上の対応―詞書や三十一文字の中に同義または類似表現があるか否か、いわば表記下の対応関係と同時に、②それぞれの歌を、所載している物語の中に据え直してみた上で、物語の展開上にも相互の関係があるや否や、いわば物語内容上の対応関係をも考察することが必要となり、その点で、あるいは計四十首の歌を物語内容に即して、いささか深読みしたのではなからうか、と本稿を閉じるに当って、なお不安を感じている次第である。大方のご教示を仰ぎたい。

(昭和六〇年八月八日記す)

注

- 12 石川徹氏『校注夜半の寢覚』(武蔵野書院、昭和五十六年十月)
 - 13 注12参照。
 - 14 関根慶子・小松登美氏『増訂寢覚物語全釈』(学燈社、昭和四十七年九月)
 - 15 阪倉篤義氏『夜の寢覚』(日本古典文学大系)、石川徹氏『校注夜半の寢覚』その他。
 - 16 注15のうち阪倉氏注。
 - 17 樋口芳麻呂氏『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房、昭和五十七年二月)。
 - 18 永井和子氏『寢覚物語の研究』(昭和四三年七月、笠間書院)。鈴木一雄氏『夜の寢覚』(日本古典文学全集)。(昭和四十九年十月、小学館)。
 - 19 注18のうち鈴木氏著。
- なお本稿の上は、「甲南国文」第三十三号(昭和六十一年三月刊)に掲載した。併せてお読み戴ければ幸甚である。